

# 保育者養成校に通う学生の就業意識に関する検討

—希望職種によって就業動機は異なるか—

黒木 晶\*・坂田 和子\*\*・牧 正興\*\*\*

Vocational Motivation of undergraduate students in the early childhood care and education course

—Effect of Vocational Motivation from desired type of job—

Aki KUROGI, Kazuko SAKATA and Seiko MAKI

## 概 要

本研究は、保育実務に関する授業を受講する大学4年生35名を対象に、就業動機の実態と卒業後の希望職種別での就業動機の変化を明らかにすることを目的として検討した。安達（2001b）の就業動機尺度を用いて質問紙調査を実施し、受講前・受講中の変化を検討した結果、受講者全体の「自己向上志向」「対人志向」「上位志向」の得点すべてにおいて受講中有意に高かった。また、保育職を希望する学生の「自己向上志向」「対人志向」「上位志向」の得点も受講中有意に高かった。加えて、他職種を希望する学生の「自己向上志向」の得点が受講中有意に高かった。このように、希望職種関係なく「自己向上志向」の得点が高くなったことは、現実的に働くことを意識した授業が就業動機を変化させる可能性があることが示された。

キーワード：保育者養成、保育実務、就業動機

## 問題・目的

近年、待機児童や保育士不足が深刻な問題として取り上げられているが、保育者を目指す学生は保育職に就くことをどのように捉えているのであろうか。保育者を目指す学生自身の保育者像と、実際に保育者として働くことは必ずしも一致するわけではない。そこで、保育者養成課程で保育に関する知識や技術を身につけていくとともに、保育者として働くことの意識を高めることが求められる。

保育者養成校に入学した学生において、保育者に憧れをもち保育職に就くことを目指す場合とそうでない場合がある。上長（2009）は、保育者養成課程学生の入学時の志望動機と「こども」イメージについて調査し、積極的に保育者を志望する学生は、子どもに対して肯定的なイメージを持つとともに、子どもを養護すべき存在であると理解していることを示している。一方、周りの人の薦めに同調して保育職を志望した傾向のある学生は、子どもに対して「苦手」というイメージをもっていることが指摘されている（上長, 2009）。

また、全国保育士養成協議会（2010）は、保育士養成施設の卒業生を対象とした調査で、保育者が保育職を選んだ理由について「子どもが好きだった」、「子どもの時からの夢であった」、「やりがいのある仕事だと思った」という回答結果（上位3つ）を得ている。これらは、学生が情緒的な志向で保育職を選んでいることや、職業に対して現実的志向が弱い傾向にあるという保育職希望者の就業動機の特徴を示している（全国保育士養成協議会, 2010）。

就業動機とは、「未入職者が未来の仕事状況に関連してもつ動機、もしくは将来携わる職業的場面を想定した動機」である（安達, 1998）。安達（1998, 1999, 2001a, 2001b）により作成された就業動機尺度は、興味や関心を反映させた就業に対する積極的姿勢の「自己向上志向」、仕事を通じた人との接触を重視する傾向の「対人志向」、仕事場面で社会的地位や名声を得ようとする傾向の「上位志向」の3下位尺度で構成されている。

保育短大生を対象とした就業動機に関する研究では、上位志向は他の志向より低い得点を示している（三澤, 2013）。また田爪（2012）による、4年制大学の保育者

\* 福岡女学院大学大学院

\*\* 福岡女学院大学

\*\*\* 久留米大学

養成課程において初めての保育所実習を経験した学生を対象とした、保育職志望の学生がもつ職業に対する意識に関する調査では、保育職志望の学生が一般職志望の学生より昇進や社会的地位の向上に対する志向が低いことが示されている。つまり、保育職を希望する学生において、昇進することや社会的な名声を得ることはさほど重要ではないのである。田爪（2012）は職業意識の変化時期について保育実習後に着目しているが、学生から社会人への移行の時期にある最終学年の学生の方が、就業に対してより具体的に長い時間をかけて検討することが考えられる。実習でわかる保育者の労働と、それ以外の実際的な実務がある中で、具体的な実務を知ることでレディネス等就業意識に関わる現実的な変化がうまれることが予想される。

今回の調査対象となる大学は、保育士養成課程に加え、学生が社会や職場への適応に繋がることを意識し、卒業後の労働に視点を置いた「保育者実務論」という科目を開講している。受講者は大学4年生で保育者を目指す学生や、小学校教諭や企業等のその他の職種を希望する学生が受講している。就職することが間近に迫る時期に、労働を現実的に検討する「保育者実務論」について学ぶ過程で学生は、働くことに対してどのように捉えていくのであろうか。

本研究では、保育実務を学ぶ学生の就業動機の実態を調査し、希望職種に着目し就業動機の変化を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 調査協力者

A県内女子大学の「保育者実務論」受講者 4年生  
35名

### 調査時期

2016年6月中旬

### 質問紙

- ① 卒業後の希望職種、希望職種への就業希望の程度について回答する5段階評定尺度
- ② 就業動機尺度（安達, 2001b）：尺度は、自己向上志向21項目、対人志向10項目、上位志向10項目の3因子41項目から構成されている。「保育者実務論」受講前と受講中の意識について、「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階評定で回答を求めた。
- ③ 「仕事」「働く」「実務」に関する自由記述：「保育者実務論」受講前に「仕事」「働く」「実務」をどのように意識していたか回想法で回答を求めた。また、「保育者実務論」を受講している今現在、「仕事」「働く」「実務」をどのように意識しているのかについて回答を求めた。

### 手続き

「保育者実務論」の授業時間の一部を利用して、質問紙を一斉に配布し、その場で回収した。調査は、無記名

方式とした。本研究では、卒業後の希望職種による就業動機尺度41項目に関する回答を分析対象とした。

### 倫理的配慮

研究目的の説明に加え、調査協力は任意であり、回答は無記名とし、回答の自由、回答を途中でやめる事ができることを説明した。また、プライバシー管理とデータ管理を徹底すること、個人が特定されることがないことについて説明を行った。

## 結果

保育実務を学ぶ学生の就業動機の実態について、受講前と受講中の変化を検討するために、*t*検定を行った。また、卒業後に保育職（保育士、幼稚園教諭）を希望している学生、他職種を希望する学生それぞれの受講前と受講中の就業動機について同様の分析を行った。

受講者全体では、「自己向上志向」の得点が受講中有意に高かった ( $t(33)=6.91, p<.001$ )。また、「対人志向」 ( $t(34)=6.76, p<.001$ )、「上位志向」 ( $t(33)=2.46, p<.05$ ) においても受講中有意に高かった（表1）。

保育職志望の学生の得点についても、「自己向上志向」 ( $t(26)=6.33, p<.001$ )、「対人志向」 ( $t(26)=6.44, p<.001$ )、「上位志向」 ( $t(25)=2.61, p<.05$ ) すべてにおいて、受講中有意に高かった（表2）。

他職種を希望する学生は、「自己向上志向」の得点が受講中有意に高かった ( $t(7)=3.19, p<.05$ )（表3）。

表1 受講者全員の受講前・受講中の得点の変化

就業動機尺度の因子	受講前・中	n	平均	標準偏差	t値 (df)
自己向上志向	前	34	3.46	0.49	6.91*** (33)
	中	34	3.78	0.44	
対人志向	前	35	3.41	0.50	6.76*** (34)
	中	35	3.68	0.47	
上位志向	前	34	2.81	0.59	2.46* (33)
	中	34	2.89	0.65	

表2 保育職希望学生の受講前・受講中の得点の変化

就業動機尺度の因子	受講前・中	n	平均	標準偏差	t値 (df)
自己向上志向	前	27	3.46	0.55	6.33*** (26)
	中	27	3.78	0.49	
対人志向	前	27	3.41	0.49	6.44*** (26)
	中	27	3.69	0.48	
上位志向	前	26	2.80	0.65	2.61* (25)
	中	26	2.89	0.70	

表3 他職種希望学生の受講前・受講中の得点の変化

就業動機尺度の因子	受講前・中	n	平均	標準偏差	t値(df)
自己向上志向	前	8	3.45	0.23	3.19*
	中	8	3.79	0.21	(7)
対人志向	前	8	3.43	0.54	2.35
	中	8	3.65	0.46	(7)
上位志向	前	8	2.85	0.37	0.50
	中	8	2.89	0.45	(7)

### 考察

本研究の結果から、保育実務を学ぶ学生の就業動機について、保育職希望学生の「自己向上志向」得点が受講前より高くなることが明らかになった。これは、保育実務を学ぶ中で保育者として働くことがより現実的になっていることを示している。また、保育職を希望する学生が保育実務を学ぶ授業を受けることは、将来の職業に興味をもつことや、組織として働く意識をもつ一助となることが示唆された。

保育職希望学生の「対人志向」得点が受講中高かったことは、子どもとの関わりだけでなく、保育者間の連携や保護者との関わりが求められる保育職において、コミュニケーションをとる等の人との関わりが重要であることについての理解が受講過程で深まっていると考えられる。加えて、保育職志望学生の受講前と受講中の因子の得点に注目すると、田爪(2012)、三澤(2013)の結果同様に、社会的地位の向上に関する「上位志向」の得点が「自己向上志向」「対人志向」より低いことが示された。しかしながら、保育職志望学生の「上位志向」得点が保育実務の授業の受講前より高くなったという結果も得られた。この結果は、保育実務の授業受講により、保育職希望学生が保育者として働く上で、周りから認められ、社会的に有意義な仕事をしたいという気持ちをもつ可能性があることを示唆している。

また、希望職種(保育職と他職種)で就業動機を検討した結果、「自己向上志向」において、保育職、他職種ともに得点が高くなったことは、希望職種に関係なく、受講過程で保育者として働くことの現実味を感じるよう

になることや、労働の視点を取り入れた授業が就業動機を変化させる可能性について示している。

以上のことから、現実的な労働を取り入れた授業の受講によって、就職活動に向けた準備や、組織における個人の役割などの学生の意識が変化することが明らかになった。本研究から、夢と夢を実現するための現実的思考の擦り合わせは、希望する職業に就くために重要であることが示唆された。

### 引用文献

- 1) 安達智子(1998). 大学生の就業動機測定を試み 実験社会心理学研究, 38(2), 172-182.
- 2) 安達智子(1999). 理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について—就業動機志向による比較— 進路指導研究, 19(2), 22-29.
- 3) 安達智子(2001a). 進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討— 心理学研究, 72(1), 10-18.
- 4) 安達智子(2001b). 就業動機尺度の概念的妥当性—動機、自己効力感との関連性について—実験社会心理学研究, 41(1), 45-51.
- 5) 上長然(2009). 保育者養成課程学生における保育者志望動機と「こども」イメージとの関連—入学時の志望動機と「こども」イメージ—近畿大学豊岡短期大学論集, 6, 41-48.
- 6) 三澤恵(2013). 保育短大生の性役割態度と就業動機の関連 プール学院大学研究紀要, 54, 235-246.
- 7) 田爪宏二(2012). 保育者養成課程の大学生における保育実習の印象および就業意識の希望進路による差—「保育者アイデンティティ」の確立の視点からの検討—鹿児島国際大学福祉社会学部論集, 30(4), 43-57.
- 8) 全国保育士養成協議会(2010). 指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅱ—調査結果からの展開—保育士養成資料集, 52.

### 付記

本研究は、全国保育士養成協議会第55回研究大会において発表したものの一部を加筆修正したものである。

調査に御協力くださった学生のみなさま、下稲美里さんに心より感謝申し上げます。